前のめりに死ね

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
前のめりに死ね

【Ｎコード】
Ｎ１４９９Ｊ

【作者名】
光差す海

【あらすじ】
極道である覇藤翔は、他の暴力団と縄張り争いで揉めてしまう。恋人を殺された翔は、勝ち目がないと知りつつも戦いを挑む……。

煙草の量が増えている。覇籐翔（はとうしょう）は事務所の黒張りのソファーに足を組んで座りながら最後の決断のための思考を重ねていた。むしろこれは生への決別の儀式とすら言えた。周りには数人の舎弟たちが銃を取り出して整備したり、同じように無言で煙草をくゆらせながら翔の言葉を待ち構えていた。誰もが清廉とした表情をしていた。もう覚悟はとうの昔に決まっている、と言う態度だった。翔は煙草の火をガラスの灰皿に押し当てた。

「ようし、明日カチコミだ。全員で行くぞ」

静かな口調だったが、熱して燃えている重いマグマのような言葉だった。彼の鋭い瞳には光が宿っていた。居合わせた覇籐組の４人全員がはっきり頷いて返事をした。その顔はむしろ嬉しそうにすら見えた。その宣言は、彼ら全員に確実なる死をもたらすと言うのに。

翔は事務所を出て、自分でシルバーのシーマを運転して自分のマンションに戻った。一人になると危ないのでは、との若頭の言葉に首を振った。

「桜峯会の奴らは必ず俺達が詫びいれて来ると思ってるから、いちいち狙いには来ねぇ」

そう言って一人で帰ってきた。予想通り、後をつける車も無ければ、家の前に待つ刺客もいなかった。舐められたもんだ、と翔はエントランスに唾を吐いた。エレベーターに乗りながら、思い出されるのは恋人の泉麻耶の事だった。何度もこのエレベーターに一緒に乗り、家に来て抱き合った。翔は本当に彼女を愛していた。籍こそ入れていなかったが、いずれは、と思っていた。それが、今度の件に巻き込まれ、俺の恋人だと言うだけで攫われて強姦されて、見せしめに五反田のゴミ捨て場に裸で捨てられた。翔ははらわたの煮える憤怒に燃え、マンションの手すりを裏拳で殴った。鋼鉄製の手す

りが少し拳状にへこんだ。

覇籐翔は日本にいくつかある広域暴力団の末端の一員として任侠の世界に足を踏み入れた。孤児で、頼れるものは己の気合と胆力だけだった。体を張った修羅場をいくつか潜り抜け、何度か警察に逮捕され、ようやく都心の片隅に小さな一家を構える事が出来た。シノギはある区画の風俗店やキャバクラなどのケツモチだった。翔は、5人の仲間と共にそこを守り、任侠としての、極道としての矜持を守る男だった。だが、ある時、一つのランパブが風営法違反で潰れ、そこへ、対立する広域暴力団が後ろ盾の高級バーが入った。最初は穏やかに話し合いが行われた。そこのケツモチの組は桜峯会と言い、会長の外山豪太は高齢で、その広域暴力団でも相当力のある地位の高い老人だった。貫目、極道としての格や経験では全く敵わないが、翔は正論で挑んだ。

「だけれども、ここはうちのシマなんで、ショバ代を払ってもらわないと困ります。営業するなと言ってるんじゃないんです」

豪太の事務所にまで赴いた翔はとうとうと話した。豪太は、吸っている葉巻をくゆらせながら鬱陶しそうな表情をした。

「幾らだ」

「上がりの25%でいいです」

「そんなにか。利益が出ないぞこっちの。内装とか女に金かけてるんじゃぞこっちは」

「わかりますが、お願いします」

しぶしぶ豪太が頷いたので、翔は帰っていった。ところが、実際に営業が始まっても、お金は一切支払われない。何度か店にも行ったが、その件に関しては会長に話してもらうしかない、の一点張りだった。しまいには、長くいられると営業妨害になるなどと言われる始末だった。

結局、半年間一度もショバ代は支払われなかった。翔はここに至

って堪忍袋の緒が完全に切れた。護衛係の葦島亨と共に、その店「ムーランラバー」へ向かった。いつ来ても店はそこそこお客が入っている。と言う事は、払えないわけではない。ボーイに店長を呼ばせた。この店長は桜峰会の者だ。

「あ、どうも」

店長の富島は露骨に表情をひきつらせた。翔の表情が明らかに怒っているのがわかったからだ。

「どうもじゃない。今日はただでは帰らないぞ。座って話させろ」

奥の応接室兼事務所に案内される。翔は厳しく睨みつけながら口を開いた。

「いい加減俺らの顔を潰すの止めてくれませんか」

富島も苛立ち始めた。綺麗なスーツを身にまとっていても中身は極道だ。もう一人、組員らしき用心棒も部屋に入ってきた。

「ショバ代の件だけど、ウチの親父が払わなくていいって言ってんだ」

「なんだと貴様！」

咄嗟に亨が吠えた。年少上がりで、誰よりも手が早い若者だ。

「払えないものは払えないんだよ。それともなんだ、ウチとやるってのか」

富島が凄んだ。桜峰会は３００人を超す大所帯だ。一方覇藤組はたったの６人だ。まともに抗争になると勝負になんかならない。だが亨にはそんな事は何の関係もなかった。

「それがどうしたんじゃ！　今この場でブチ殺してやるぞ！」

亨が腹に差したドスを抜こうとした。富島の後ろの背の高い用心棒が飛び掛ってきた。二人は激しく揉みあった。その拍子に、亨の抜いたドスが用心棒の首に刺さった。翔が止める間もなかった。用心棒は喉を押さえて倒れ、すぐに救急車が呼ばれた。

結局、用心棒は命は取り留めたが、喉に障害が残る事になってしまった。翔は自分が盃をもらっている叔父貴に全て報告した。叔父

貴は上の人間同士でナシをつけてやる、と約束してくれた。亨は警察に出頭して拘留されたままだ。一週間ほど経って、叔父貴から連絡があった。

「今回の件だが、先に手を出したのはこっちだし、怪我したのも向こうだから、お前が詫び料包んで謝罪してくれ、それで終わりだ」

翔は耳を疑った。俺が、金を払って謝る、だと？

「お、叔父貴、冗談でしょう。俺はショバを荒らされた側なんですよ」

「向こうは払うつもりだったと言ってる。お前のほうで一方的に暴れたに過ぎない」

そ、そんな。翔は我が耳を疑ったが、それ以上何を言っても無駄だった。翔は豪太に連絡だけはした。ただし、謝罪もしなかったし、金も一円も払わない、と宣言した。豪太は、そうか、わかった、とだけ言って電話を切った。

そして、桜峰会からの報復は起こった。翔の恋人が無残に殺された。その死の状況を警察で聞いた時、翔は爆発した。ナシがついた？相手は３００人？そんな事の全てはどうでもよかった。勝てないとか、死ぬ事になるとか、そんな事もどうでもいい。豪太を、殺す。そう翔は決意したのだった。

翌朝は清々しかった。朝日は暖かく、空気は心地よかった。翔はベランダへ出て頷くと、白のスーツに着替え、拳銃を三丁持ち、防弾チョッキを着込み、さらに腹に短刀を差し込み、シーマに乗った。事務所に着くと、もう残りの四人も待っていた。何も言う事も無い、硬く握手し、一台の黒のバンに乗り込んだ。

桜峰会会長外山豪太の家は閑静な住宅街にあった。屋敷は古式で上等な瓦造りで、さぞや、と言う豪勢な生活を思わせるものだった。広大な家の周りには何台かの黒塗りのベンツやＢＭＷが停まってい

る。
「どうします」
「関係ない。正門の前に行け」
若頭の瀬尾武夫の質問に、翔は何の迷いもなく正面からの突破を命じた。外山宅の正門玄関の前には４人の屈強な組員がいた。５人は一度にバンを降りた。
「何だお前は！」
門番が何か言う前に翔は二丁の拳銃を取り出して連打した。穏やかだった住宅街に突如として激しい鋼鉄の咆哮音が響き渡った。４人とも何も出来ず血ダルマになって死んだ。武夫が取り出した銃で門扉を撃った。鍵が壊れ、翔が足で木の扉を蹴り開けた。途端、邸宅のほうから銃声が響き渡り、５人は散らばって伏せた。
「低い姿勢で進め。無駄撃ちするんじゃねぇぞ！」
翔はそう声をかけて、自らも庭にある灯篭や植木鉢などに隠れて少しずつ進んでいく。拳銃と言うのは、実は思ったほどは当たらない。よほどの腕前でない限り、せいぜい５ｍぐらいまで接近しないと急所を打ち抜けない。豪太宅の玄関から数人の組員が手に拳銃や日本刀を持って飛び出してきた。翔は舌なめずりをした。さて、死ぬか。灯篭の影から飛び出した途端左足に激痛が走った。まるで焼けた串に貫かれたようだ。だが、翔の乱打した銃弾も多く命中し、二人ほどが胸から血を吹いて倒れた。屋内から次々と新手の敵が出てくるし、外で待機していた連中も飛び込んできた。覇藤会の者は一人、また一人と撃たれ、切られた。若頭の武夫も血を吐いて死に、遂に、生きているのは翔一人だけになってしまった。拳銃の弾は尽き、肩と足と腰を銃弾に貫かれ、右腕も切られていた。全身から血を吹き、それでもなお、豪太邸の玄関前の石畳に仁王立ちしていた。鬼気迫るその姿に、桜峯会の連中も気おされていた。その時、翔の目に見えた。二階の片隅から、こわごわ見下ろしている豪太の姿が。い、やがった、な。俺、はお前を、殺しに、来たんだ。動かない足を引きずって一歩一歩家のほうへ向かう。一人が後ろから撃った。

翔の背中に鮮血がほとばしった。だが、彼はまだ歩いている。血の海を作りながら。そして、叫んだ。

「ごぉうたぁぁ！　ころしてやるぞぉおぉ！」

その瞬間、前にいた４人が一斉に拳銃の引き金を引いた。翔の額に穴が開いた。心臓も裂けた。にもかかわらず、翔は前のめりに倒れた。静かに倒れた。途端に静寂が訪れた。誰もが息を呑み、次の行動が取れなかった。

やがて、警察のサイレンの音が鳴り響いてきた。それは、ある種のレクイエムのように聞こえた。（終わり）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1499j/

前のめりに死ね

2010年11月12日16時25分発行